

原子炉実験所だより

目次

1. 平成13年度共同利用研究の公募について	1
2. 平成12年度下半期共同利用研究の審査結果について	2
3. 平成12年度下半期臨界集合体実験装置共同利用研究について	2
4. 原子炉実験所運営委員会候補者、共同利用研究委員会委員候補者、 原子炉利用研究者グループ幹事選出にかかる選挙の投票について	3
5. 京都大学原子炉実験所「将来計画」短期研究会の開催について	3
6. 京都大学原子炉実験所平成12年度「将来計画」短期研究会プログラム	4
7. 第35回京都大学原子炉実験所学術講演会開催案内	4
8. 共同利用委員会の責務を終えて(赤星 光彦)	6
9. Impressions for Kyoto University Reserch Reactor Institute(徐 曉勤)	8
10. 外国人研究者講演会報告	9
11. 外国人共同研究者の受入れについて	10
12. 外国人受託研修員の受入れについて	10
13. 職員の異動	11
14. 委員会メモ(平成12年5月～平成12年7月)	12
別表 平成12年度下半期共同利用研究採択一覧	13
☆ 第35回京都大学原子炉実験所学術講演会講演申込書	
編集後記	17

1 . 平成13年度共同利用研究の公募について

平成13年度の共同利用研究の公募は、下記のとおりです。

記

1)平成13年度共同利用研究

9月下旬公募要項配布予定

提出締切日：平成12年11月10日(金)

2)平成13年度ワークショップ・専門研究会

9月下旬公募要項配布予定

提出締切日：平成12年11月10日(金)

3)平成13年度臨界集合体実験装置共同利用研究

11月中旬公募要項配布予定

提出締切日：平成13年1月19日(金)

なお、13年度の採択後に平成13年10月～平成14年3月までの下半期の公募を別枠で行いますが、改めて通知いたしませんので公募要項で内容を確認して下さい。

公募要項の入手方法

公募要項の入手方法は関係機関へ郵送したものからコピーをとるか、共同利用掛窓口で直接請求するほか、以下の3つの方法があります。

① 原子炉実験所共同利用掛のホームページから印刷する。

<http://www-j.rri.kyoto-u.ac.jp/JRS/> (共同利用掛)

上記へのアクセスは原子炉実験所のホームページ

<http://www-j.rri.kyoto-u.ac.jp/>

から「案内」、「共同利用掛」の順にクリックしても可能です。

② Eメールの添付ファイルとして受け取る。

希望者には word 版ファイルを配布いたしますので、必ず E メールで共同利用掛へ申し込んで下さい。

Eメールの申込みには以下のことを書いてください。

(word 版ファイル希望と明記のうえ)

所属機関・学部等名、氏名、昼間連絡のとれる電話番号

windows の word で作成しているため、他の OS で読めない場合があります。

単に word 版ファイル希望とした場合、KUR 共同利用の公募要項を送付します。CA や専

門研究会等の要項希望の場合は、その種別も記入して下さい。

送信時期は上記の公募要項配布予定の頃になります。なるべく配布予定時期の前に申し込んで下さい。

3 郵送により入手する。

ネットワークを利用していない等の理由で希望する場合は、共同利用掛へご連絡ください。

申請書類の提出

上記提出締切日までに共同利用掛窓口へ直接持参するか、「書留」または「簡易書留」で郵送してください。

提出先及び問い合わせ先

〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町野田 京都大学原子炉実験所共同利用掛
(TEL : 0724 - 51 - 2312、FAX : 0724 - 51 - 2620 E-mail:kyodo@rri.kyoto-u.ac.jp)

2 . 平成12年度下半期共同利用研究の審査結果について

7月7日開催の共同利用研究委員会において、申請のあった平成12年度下半期共同利用研究9件(プロジェクト採択0件、通常採択9件)について、審査の結果、2件を不採択とし7件が採択されました。(採択一覧は、巻末の別表(P13)を参照)

3 . 平成12年度下半期臨界集合体実験装置共同利用研究について

標記の公募については申請がありませんでした。

4 . 原子炉実験所運営委員会委員候補者、共同利用研究委員会委員候補者、原子炉利用研究者グループ幹事選出にかかる選挙の投票について

原子炉利用研究者グループでは、9月1日から10月16日(月)正午までを投票期間として選挙を実施いたします。会員の方にはぜひ投票されるようお願いいたします。

5 . 京都大学原子炉実験所「将来計画」短期研究会の開催について

当実験所の将来計画に関する研究会を下記により開催いたしますので、ご参加下さるようご案内いたします。

記

日 時：平成12年10月26日(木)13時30分～10月27日(金)12時

場 所：京都大学原子炉実験所 事務棟会議室

趣 旨：実験所の将来計画に関する討論

申込方法等：1) 申込み先 〒590 - 0494 大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所 共同利用掛

T E L 0724 - 51 - 2312

F A X 0724 - 51 - 2620

E-mail kyodo@rri.kyoto-u.ac.jp

2) 申込期限 平成12年10月12日(木)必着。

3) 申込方法 ハガキ、F A X、E メールまたは電話により以下の内容をお知らせ下さい。

将来計画短期研究会参加申込書

1 . 氏 名

2 . 所属・職名

3 . 電話番号(昼間)

4 . 出欠の有無と宿泊希望(で囲んで下さい)

	10月26日(木)	10月27日(金)
研究会出欠		
宿 泊		

宿泊場所は、当実験所の研究員宿泊所になります。

6. 京都大学原子炉実験所平成12年度「将来計画」 短期研究会プログラム

日 時：平成12年10月26日(木)・27日(金)

場 所：原子炉実験所 事務棟会議室

10月26日(木)

13:30 - 13:50	開会挨拶・経過報告	井上 信所長
13:50 - 14:10	研究用原子炉の役割	
14:10 - 15:10	研究用原子炉の課題と提案(私大炉等)	
15:10 - 15:30	休憩	
15:30 - 16:30	研究用原子炉の課題と提案(京大炉等)	
16:30 - 17:30	討論・コメント	
17:40 - 19:00	懇親会	

10月27日(金)

9:00 - 10:30	研究用原子炉の課題と提案(その他)	
10:30 - 10:50	休憩	
10:50 - 11:50	討論・コメント	
11:50 - 12:00	総括・閉会挨拶	井上 信所長

7. 第35回 京都大学原子炉実験所学術講演会開催案内

第35回京都大学原子炉実験所学術講演会を下記の要領で開催いたします。今回は各研究部門・附属施設で行われた研究の中のトピックスを各部門・施設それぞれ一演題について、十分な講演時間を取り、異分野の研究者にも理解できるように口頭発表していただきます。一般講演はすべてポスター形式で行います。プロジェクト研究の成果発表、退官記念特別講演は従来通りです。

なお、口頭発表は、SCS(Space Collaboration System)を使用する予定です。

講演者(1題につき1名)には、実験所から旅費が支給される予定です。

記

開催日時：2001年1月24日(水) 9:00～18:00

25日(木) 9:00～17:00

プログラムの都合で時間の変更が生じる可能性があります。

開 催 場 所：京都大学原子炉実験所 事務棟会議室（口頭発表）

図書棟会議室（ポスター発表）

講演会内容：① 原子炉実験所各研究部門・附属施設による講演

各研究部門・附属施設で行われた研究の内、トピック的な成果をそれぞれの推薦によって選ばれた原子炉実験所内の研究者による口頭発表。

② 一般講演

実験所の設備、設備、技術を利用して行った研究成果の発表。すべてポスター発表。1月24日(水)夕方より、ポスター会場で質疑応答。飲み物を用意いたしますので、多数のご参加と活発なご討論をお願いします。

③ 特別講演

A) 中性子科学研究部門の岩田豊先生、宇津呂雄彦先生、放射線生命科学研究部門の北岡祥伯先生による停年退官講演。

B) 平成10年度に開始されたプロジェクト研究「環境中極低放射能の分析法の開発 - プルマーサルと核融合の時代に備えて」、「制御照射場による材料効果の研究」の成果講演と討論。

一般講演の申込方法

講演題目申込締切：2000年10月20日(金)(必着)

申 込 先：京都大学原子炉実験所学術公開委員会 委員長 藤井 紀子

申込方法：本号末尾の申込書と同等の内容を nfujii@HL.rri.kyoto-u.ac.jp にお送り下さい。FAX(0724 - 51 - 2630)又は郵送でも構いません。

講演会報文集原稿提出（すべての講演について）

締 切： 2000年11月24日(金)(必着)

提出先： 一般講演の講演題目申込先に同じ

原 稿： A4用紙で6枚以内

作成要項は一般講演申込者及び口頭発表者に送付いたします。6枚を越える原稿は受理いたしませんのでご注意下さい。カメラレディ原稿と共にフロッピーディスク（オリジナルとテキスト形式）も提出して下さい。

以上

8. 共同利用委員会の責務を終えて

赤 星 光 彦

二年間を共同利用委員会委員長として大過なく勤めさせて頂き、所内外委員の先生方を始め利用者、所員の皆様のご協力に心から感謝したい。二年の体験が語るところはこの委員会が相反する要求のぶつかり合う場所だということであった。そこでは、共同利用者側からの出来るだけマシンタイムと出張日数（人員）を確保したいという要求と限られたマシンタイムと旅費を如何に効率よく配分するかという委員会側の要求がせめぎ合うこととなる。委員会としては利用者の希望を全て満たすと必要経費もマシンタイムも2、3倍は必要となるから、ともすれば制限を目的とした審査を行わざるを得ない。これを毎年々々、膨大な申請書類をもとに繰り返すわけだから、出来るだけ審査を簡略化するためのルールを作ることになる。しかし一度ルールができると、翌年にはこのルールの目をくぐる申請が出されてきて、数年後にはまた別の規制が必要になると言う具合に両者間に際限のないイタチごっこが繰り返されてきた。この悪循環を断ち切り、効率よく審査を終えるには、例年の審査の中で問題となった事項を委員会内のみにとどめておかず、出来るだけ周知せしめて皆さんにも考えて頂くことが必要であろうとの認識が委員会で出来上がり、その責を委員長に委ねられた次第である。今期には例年議論を醸す重複申請や申請者の資格問題等々、既存のルールで事務的に処理出来る問題も多々議論されたことではあったが、新たな問題も出てきた。それは所員自身が代表者となる申請が近年、増えつつあるという問題である。今回、この問題に関連して個々のケースにつき調査した結果に触れておきたい。

所員が代表者となる申請は実は25年前にもあったことである。申請代表者となることのメリットとして、まず第一に共同利用研究費の配分にあずかることが出来る点が挙げられる。当時のケースは申請者が助手であり、採択されることによって年8万円の研究費の配分にあずかるという名目も一応は成り立った。当時の助手は年間20万円しか公費の配分がなかったから、採択はされなかったけれどもこの名目は充分根拠を持つものと理解された。しかし現在は公費も増え、逆に共同利用研究費は半減されている。その上所員の場合、プロジェクト研究を主導することも推奨されている。従って、たとえ申請者が助手だったとしても（幸い今回のケースでは助教授層であったが）研究代表者となることのメリットは薄いと考えられる。

次なる根拠として、申請によって自分の研究をデモンストレーションしたいとの欲求もあるらしい。審査する側は申請書が出てくれば読まざるを得ないので、申請者からすれば読ませることでデモンストレーションする目的の一部は達成されるのであろう。しかし読まされる側からすれば、申請書の数が増えるに依じて手間も増えることになる。しかも全く専門違いの申請書を読まされ、議論を強制されたと感じさせるデメリットも生ずる。この様な場でデモンストレーションせずとも、結果を出してもっと専門の場や国際的な場でデモンストレーションせよと言いたくもなろう。

最後に、マシンタイムを確保したいとの要求から申請する場合もあった。重水設備その他の利

用度の高い設備では、共同利用として採択されると条件の良いマシンタイムを確保できる。一方、一般所員としてこれらの設備を利用する場合には、共同利用実験のために優先的に配分された残りの時間に割り込むことになる。いきおい、週末の真夜中等々条件の悪い時間に実験せざるを得ないこととなる。この説明は調査した限り、所員が申請者となる最も説得力のある根拠を持つものであった。このように利用頻度の高い設備では採択がマシンタイムの優先的確保に直結するのではなく、共同利用者にも所員にもある程度までは実験条件の良いマシンタイムが配分されるように調整することが必要かもしれない。この様な調整ならばタイムスケジュール委員会の段階でも可能と考えられる。ただし、この議論に立ち会った所外委員の声として「所外の研究者は限られた時間内で実験するのだから、所員がこの点である程度我慢するのは当然であろう」とする意見があったことも付記しておきたい。

考えてみれば、所内、所外研究者間での研究費やマシンタイムの取り合いはむしろ歓迎すべきことかもしれない。お互いが競争意識を働かせ研究活動が盛んになり、成果が上がることに繋がるのであれば、共同利用委員会としては両者間の調整を取る労を決して惜しむべきではないと思う。ただ、両者間の競争と対立が建設的に作用するためには限られた予算とマシンタイムを利用者全員で有効に使いあっているのだという自覚を所員を含む利用者の方々にもう少し徹底して頂くことが前提として必要であろう。この様な前提に立たない競争と対立は何物をも生み出さない。

研究者と言うものは本質的に独善的、利己的なものである。またそうでないと独創的な研究は出来ない。しかし全ての研究者が徹底的にエゴを通すならば組織は成り立たなくなる。研究費やマシンタイムは言うに及ばず、全てが定まった枠の中で成り立っている大学の様な組織で一人がエゴを通すとその負債は他人が被ることになる。大抵は周辺のおとなしい研究者や技術者、事務官達が被害を蒙り、しかし黙って堪えているのである。被害の度合いが許容範囲を超えなければ何とか組織は収まっているが、所内所外の軋轢や階層間の対立、不満感が許容範囲を超えると組織は自滅に向かう。独立法人化を始めとする大学つぶしの画策が跋扈する中、自分の属する組織の中でエゴを貫くことによる利害と得失を一人一人が自覚することが大切に感じられた二年間でもあった。

最後になったが、共同利用委員会を支えて下さったタイムスケジュール委員会および共同利用掛の皆さんの仕事に触れておきたい。特に作今、原子炉その他のトラブルでスケジュールが変更になることが多い。その様なとき新たな調整のやり直しやあちこちからのクレームに対する対応等々、この人達にかかってくる仕事は一気に膨れ上がる。この目立たないが大切な仕事に携わり、縁の下から所を支えて下さる皆さんに心から感謝の意を表したい。

9 . Impressions for Kyoto University Research Reactor Institute

Xu Xiaoqin (徐 晓勤)

China Institute of Atomic Energy, Beijing, China

As a visiting scientist I have spent one year at Kyoto University Research Reactor Institute, working in nuclear energy science division, neutron irradiation damage research group hosted by Professor Yoshiie. Since I was a student in China, I have often seen the name, KURRI, in many science journals and reports and I knew that KURRI was the largest reactor research institute among universities of Japan.

KURRI is located at Kumatori, a beautiful town near the famous Kansai International Airport. The site is very calm with fresh air and clear sky, and very suitable for scientific research. The environment is very good and charming. The guest house sit near the research building, and the life is very convenient and satisfactory. The green golf court and exercise court are very comfortable, flowers are very beautiful for four seasons, and the wild animals (birds, cats and fish) are very happy in the institute.

Neutron irradiation damage is dependent on neutron spectrum and irradiation condition. Investigating the effects of neutron spectrum on material irradiation damage is very important in nuclear material research. This is the main research subject of Professor Yoshiie's group and I was also involved in this research subject during my stay in KURRI.

I am also very excited for the news of Accelerator Driven System (ADS) project in KURRI. As a new concept for nuclear energy generation, waste transmutation and experimental facility, ADS project will be a challenge for subcritical reactor physics calculation, subcritical reactor kinetics analysis, reactor-target coupling analysis, heat transfer from target surface, and irradiation damage of window/target materials. ADS will be an important tool of nuclear science experiment in near future. In China Institute of Atomic Energy, an ADS project is under development. In this plan, subcritical swimming pool type experimental reactor will be driven by a 200MeV proton linac. It will be a useful equipment for neutron science research, MA transmutation, material science, isotope generation, *et al.* KURRI is an important unit in nuclear science field. All employees in KURRI are always positive, generous, trustworthy, professional and very serious in their work.

I thank KURRI for the financial aid, Professor Yoshiie for a memorable hospitality, Dr. Xu and Dr. Satoh for the help in my research. I also want to give my warmest thanks to all people in our research group and in nuclear energy science division who organized the trips to Tokyo and helped my research work. I want to thank all of colleagues in KURRI for a pleasant stay. My stay in

KURRI was one of the pleasantest experiences in my life. The warm hospitality will remain fresh in my memory forever.

I am looking forward to seeing you again in China or Japan, and a closed science exchange between CIAE and KURRI. Thank you all very much.

徐 曉勤さんは中華人民共和国 中国原子能科学研究院の助教授で平成11年6月から1年間原子炉実験所外国人研究員として「中性子の損傷エネルギー Spektrum に基づいた照射損傷構造発達過程の解析」の研究に従事され、このたび帰国されました。

(受入教官 核エネルギー基礎研究部門 義家敏正教授)

10．外国人研究者講演会報告

原子炉利用研究者グループの後援により、下記のとおり講演会が行われました。

開催日時：平成12年5月22日(月) 15:00～17:00

場 所：図書棟会議室

出席者：15名

講 師：米国、Southern California University 名誉教授、James C. Warf

演題及び講演概要：Manhattan Project: Origins and Consequences, a Personal Story

Dr. WARF は、24歳のときにマンハッタン計画に参加し、ウラン化合物研究のチームリーダーとしてウラン精製や再処理の研究に従事した。その後長らく南カリフォルニア大学化学教室の教授を務め、現在 ALL THINGS NUCLEAR という本をまとめている。本講演では、核分裂の発見からマンハッタン計画、広島・長崎原爆製造に至る経緯や、いろいろなエピソードが紹介された。シカゴパイル1の臨界では、暴走に備えてホウ酸水のバケツをもった人が炉頂に待機していたとか、ハンフォードの Pu 生産炉 (250MW) の出力が当初は上がったたり下がったりして不思議だったが、キセノン毒の存在を突き止めてなんとか安定に運転できるようになった、などといった話があった。広島原爆の U235は濃縮度約80%で約50kg が用いられたこと、長崎原爆の Pu239には Pu240が6%混ざっていたことなども紹介された。

マンハッタン計画に参加したことについては、今から考えると間違っていたが当時は若くて判断できなかった、ということであった。マンハッタン計画の責任者であった Groves 将軍に対する反発的評価と、すべての核兵器を廃棄すべきであるという意見が印象的であった。

11．外国人共同研究者の受入れについて

氏 名	研 修 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官
石 志 堅 (台湾原子力研究所研究 員)	原子炉及び実験設備 の運転管理状況の調 査	平成12年7月3日～ 平成12年8月11日	核エネルギー基礎 研究部門 教授 三島 嘉一郎

12．外国人受託研修員の受入れについて

氏 名	研 修 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官
Azman Jaapar (マレーシア)	一般核エネルギー開 発	平成12年4月4日～ 平成12年6月28日	原子炉安全管理 研究部門 助教授 小林 捷平



13．職員の異動

1．退 職

平成12年 7 月15日付け

技術室実験設備管理掛長
(辞職)

技 官

まつ した るく じ
松 下 録 治

2．採 用

平成12年 5 月 8 日付け

核エネルギー基礎研究部門

リサーチ・アシスタント

た なか ふとし
田 中 太

核エネルギー基礎研究部門

リサーチ・アシスタント

いし ざき とし たか
石 崎 敏 孝

バックエンド工学研究部門

リサーチ・アシスタント

ふじ わら けん そう
藤 原 健 壮

放射線生命科学研究部門

リサーチ・アシスタント

た なか けん いち
田 中 憲 一

平成12年 6 月 1 日付け

中性子科学研究部門

助 手

い とう けい じ
伊 藤 恵 司

核エネルギー基礎研究部門

研究支援推進員

さい がん き ち こ
西 願 佐知子



14. 委 員 会 メ モ

(平成12年5月～平成12年7月)

平成12年

- 5月12日 臨界集合体実験装置共同利用研究委員会(回議)
- 5月18日 原子炉安全委員会(臨時)
- 5月19日 協議員会、同懇談会
- 5月23日 原子炉医療委員会
- 5月26日 原子炉安全委員会
- 6月16日 協議員会、同懇談会
- 6月23日 原子炉安全委員会・保健物理委員会合同会議
- 7月7日 共同利用研究委員会
- 7月21日 運営委員会
- 7月21日 協議員会、同懇談会
- 7月21日 研究計画委員会
- 7月28日 原子炉安全委員会



別表

平成12年度下半期共同利用研究採択一覧表（通常採択分）

申 請 者 ・ 協 力 者			研 究 題 目	採 択 区 分	実験所内 連 絡 者
氏 名	所 属 ・ 職 名				
矢 永 誠 人	静大・理	助教授	亜鉛欠乏マウス臓器中の微量元素の分析	共同 通常	中野 武内
吉 田 努	〃	院生			
大 山 拓 也	〃	〃			
大 橋 康 典	〃	〃			
前 津 仁 美	〃	〃			
武 内 孝 之	京大・原子炉	助手			
中 野 幸 廣	〃	技官			
山 本 孝 夫	阪大院・工	助教授	六方晶フェライト Ba ₃ CO ₂ -xFe ₂₄ +xO ₄₁ の磁気構造の研究	共同 通常	川野 福永
中 川 貴	〃	助手			
福 永 俊 晴	京大・原子炉	教授			
川 野 眞 治	〃	助教授			
橋 武 司	阪大院・工	院生			
加 納 正 孝	〃	〃			
泉 健 二	〃	〃			
吉 田 茂 生	阪大院・工	助手	低線量放射線照射による植物生理機能刺激効果に関する研究	共同 通常	古林 櫻井
村 田 勲	〃	助手			
栗 栖 義 臣	〃	院生			
吉 岡 健 太 郎	阪大・工	学生			
藤 田 薫 顕	京大・原子炉	教授			
古 林 徹	〃	助教授			
櫻 井 良 憲	〃	助手			
太 田 仁	神大・理	助教授	電子ライナックからのコヒーレント放射を用いたリチウムイオン2次電池材料のミリ波分光	共同 通常	松山 高橋(俊)
松 山 奉 史	京大・原子炉	教授			
高 橋 俊 晴	〃	助手			
羽 月 健 司	神大院・自然科学	院生			
三 浦 裕 一	〃	〃			
上 田 健 一	〃	〃			
川 上 幹 児	〃	〃			
二 瓶 仁	東大院・工	助手	中性子崩壊時の陽子測定用低エネルギー陽子検出器の開発研究	共同 通常	宇津呂 河合(武) 奥村
井 上 信 幸	京大・エネ研	教授			
細 野 光 市	東大・工	技官			
宇 津 呂 雄 彦	京大・原子炉	教授			
河 合 武	〃	助教授			
奥 村 清	〃	技官			

申 請 者 ・ 協 力 者			研 究 題 目	採 択 区 分	実 験 所 内 連 絡 者
氏 名	所 属 ・ 職 名				
増 永 慎 一 郎	京大・原子炉	助教授	生体還元物質を基礎とする中性 子捕捉療法のための硼素 - 10標 識化合物の開発	共同 通常	
切 畑 光 統	大阪府大・農	教授			
堀 均	徳島大・工	〃			
永 澤 秀 子	〃	講師			
古 林 徹	京大・原子炉	助教授			
櫻 井 良 憲	〃	助手			
佐 藤 博 夫	国際医療福祉大	教授	医用中性子照射線量分布の T L 式新解析手法の評価研究	共同 通常	古 林 櫻 井 義 本
橋 本 光 康	〃	講師			
国 枝 悦 夫	慶応大・医	〃			
佐 久 間 洋 一	核融合研	助教授			
植 木 紘 太 郎	船舶技術研	室長			
古 林 徹	京大・原子炉	助教授			
櫻 井 良 憲	〃	助手			
義 本 孝 明	〃	技官			



2000年 月 日 申込

第 35 回京都大学原子炉実験所 学術講演会一般講演申込書

1. 講演者（所属・氏名 説明者に 印）＊

2. 講演題目＊

3. 講演内容（300字程度で記載して下さい）

4. 連絡先

氏名

所属機関名および所在地（郵便番号をお忘れなく）

電 話

F A X

e-mail

＊講演者名および講演題目については、後日、ご提出して頂く講演会報文集の原稿にも同一の記載をして頂くため、本申込書の写しをお手元に保管しておいて下さい。

編集後記

暑い夏である。KURの初臨界以来36年目の夏である。自然は巡る。実験所構内には、開設以来ほとんど人跡未踏と言うべき林や湿地帯が残っており、意外な自然がある。狸や雉の姿は日常的に見られるし、春には、さまざまなスミレが花咲く。先日、この人跡未踏地帯に、足を踏み入れる機会があった。いまでは、姿を見ることの少ない、かつての昆虫少年達がよだれをたらしそうなトンボや蝶がたくさんいる。危ない危ないと世間から騒がれる原子炉の直近にこんな場所があるのは、いささか皮肉な話であるが、厳しく要求される安全と安心の代償として、おてんとうさんが恵みくださった自然の豊かさなのだろう。

実験所も第一世代の所員がここ数年のうちに所を去り、技術や研究の継承が大きな課題となっている。実験所の初期は、まさに日本経済の高度成長の時期に重なっており、がんばり、作り、追い越すという猛烈日本経済の雰囲気強く反映していた時代でもあった。巨額の研究費を獲得し、おおきな研究組織を作ると言うことが、多くの研究組織にとっての至上命令でもあった。

生きるために働くのか、働くために生きるのか、高度成長の時代、まさにほとんどの日本人は働くために生き、組織のために働いてきた。研究者の立場にいいかえれば、研究のために生き、研究組織のために研究するということになるだろう。これが、この国の社会と歴史を支えてきた最大の力であったことは、間違いない。しかし、危険も多い。大平洋戦争の時、おおくの日本人は戦争のために生き、戦争のために働いた。

生きるために働き、豊かな暮らしよりは豊かな人生を求めるという生き方は高度成長の考え方とは逆である。最近やたらに多い少年犯罪を聞くにつけ、社会的な余裕のなさや逼迫感をおもう。少々世の中の進みかたが遅れても、お互いの人生を楽しもうというラテン系の人たちの考え方も悪くないと思う今日この頃である。科学技術の進歩がおくられてもよいからそれぞれの研究を楽しもうと言ったら、いささか筋の通らぬ話ではあるのだが。

(S)

